

鮎中毒

読者のみなさんこんにちは。東海能開大の河瀬先生より紹介を受けましたポリテクセンター埼玉の大石と申します。河瀬先生には、私が岐阜短大にいたころ、いろいろお世話になりました。もともと某企業で車の部品の開発をされていたこともあり、飄々とした風格ながら大変頭の切れる方で、めちゃくちゃアウトでパワーだけで仕事をこなしていた私にとっては、仕事上のお手本となる方でした。仕事だけでなく、釣りやスキー、あげくの果ては先生のご実家において食事をごちそうになったりと、岐阜時代は公私ともにかなり図々しくお世話になりました。ということで先生から依頼のメールが来たとき「OK」と即返事してしまいましたが、なんせアウトな性格、締め切りぎりぎりまですっかり忘れておりました……。

◇

流されそうな瀬に腰まではいり、「ガリガリッ……ガツーン」、10メートル近い竿がのされそうになる。この醍醐味を味わった者はだんだんと深みにはまってやがて鮎中毒になる……。もっとも、今から20年以上前、小学校のとき初めて友釣りをやったときには、今のような鮎キチになるとは思いませんでした（そのころはルアー釣りにはまっていた）。

本格的にはまったのは、岐阜短大に赴任して2年目の夏ごろからです。きっかけは、同僚の先生に職員旅行のあと木曽川水系の和良川につれていってもらってからでした。訓大に入るぐらいまでは年に何回かはやっていたので、少なくともボウズにはならないだろうとたかをくくっていましたが、数年のブランクがきて友をうまく操れず、結果は0匹。「くやしいなー」と思うとともに、「だれよりも釣れるようになってやる」。

そう、このときに鮎中毒になってしまったのでした。もともと凝り性なので何かやり始めるとはまってしま

質なので、ただでさえはまりやすい友釣りに見事にどっぷりとはまりました。

それからは、暇があれば釣りに行き、行けないときは雑誌やビデオで釣り方を研究したり、仕掛けをいろいろ工夫したりと、夏のシーズン中は、仕事と食事時以外寝てもさめても友釣りのことを考えていました（この熱意を仕事に向けていれば、今ごろはきっとスーパー指導員になっていたでしょう）。ただ、岐阜にいるころは、釣れても半日で10匹、だいたい平均数匹ぐらいとへボ釣り師もいいところでした。人並みになったのは小山短大への転勤をきっかけに那珂川に通い始めたころからです。

那珂川にかよいだ始めた最初のころは、雑誌とかビデオで研究した仕掛け、釣り方でやっていました。あるとき、「つれないなー」とまわりをみていると、地元の人がぼんぼんとかけていました。仕掛けはシンプルそのもの、竿を操作して鮎をルアーを引くように泳がし、掛かったら竿をためて立て、すかさず後ろにぶち抜く。このときすっかりと魅せられてしまい、以降那珂川で釣るときは地元の人が釣っているのをまねして釣るようになりました。

まねも続けると何とかなるもの、今ではなんとか形になり、まわりが掛かってないときでも掛けられるようになり、そこそこ掛かっているときは半日で10~20匹くらいは掛けられるようになりました……。と言いたいところですが、実際のところ腕はまだへボのままです。中毒から抜け出るのはまだ先ようです。

◇

さて、今回のリレートークですが、訓大時代、何度となくレポート提出の危機を救ってもらった、ポリテクカレッジ青森の東英嗣さんをお願いしたいと思います。それでは東さんよろしくね。